

『望みに生きてます』ローマ8:18-25

8:18 わたしは思う。今のこの時の苦しみは、やがてわたしたちに現されようとする栄光に比べると、言うに足りない。

8:19 被造物は、実に、切なる思いで神の子たちの出現を待ち望んでいる。

8:20 なぜなら、被造物が虚無に服したのは、自分の意志によるのではなく、服従させたかたによるのであり、

8:21 かつ、被造物自身にも、滅びのなわめから解放されて、神の子たちの栄光の自由に入る望みが残されているからである。

8:22 実に、被造物全体が、今に至るまで、共にうめき共に産みの苦しみを続けていることを、わたしたちは知っている。

8:23 それだけではなく、御霊の最初の実を持っているわたしたち自身も、心の内でうめきながら、子たる身分を授けられること、すなわち、からだのあがなわれることを待ち望んでいる。

8:24 わたしたちは、この望みによって救われているのである。しかし、目に見える望みは望みではない。なぜなら、現に見ている事を、どうして、なお望む人があろうか。

8:25 もし、わたしたちが見ないことを望むなら、わたしたちは忍耐して、それを待ち望むのである。

●序論

「希望学」というもののインタビュー記事の序文を抜粋してここで紹介しましょう。

「現代は、誰にも希望が与えられているような時代ではなくなりました」。

希望という言葉は、仏教文化の言葉ではないようですね。漢字では「希まれな望み」と書きますが、キリスト教が迫害されていた時代に人々が命を懸けて守ろうとしてきたものなんじゃないですかね。

聖書には、たくさん「希望」とか「望み」という言葉が使われています。そしてその希望に生きる人が、クリスチャンの歩みだと言えます。

聖書が語る「キリストによる救い」が、来たるべき日の希望によって生きる者としてくれる。それが救いであり、それは福音です。今日最初にお読みした御言葉につながります。

8:18 わたしは思う。今のこの時の苦しみは、やがてわたしたちに現されようとする栄光に比べると、言うに足りない。

そして、もう一つ。

8:24 わたしたちは、この望みによって救われているのである。

希望が見いだせないという時代に、キリストの望みに生きるわたしたちの幸いです。

●本論

I. 苦しみの中でも

8:18 わたしは思う。今のこの時の苦しみは、やがてわたしたちに現されようとする栄光に比べると、言うに足りない。

パウロが苦しみと語ったのは、当時、キリスト者であるがゆえに受けていた迫害であり、また貧しさや病、困難などです。

初代教会の特徴を列挙した書籍の中で、そのひとつにこういうポイントがありました。

▶命を懸ける値打ちのある信仰

それは、殉教をも覚悟したキリスト者たちの信仰であったということです。公衆の面前で辱めを受け、迫害にさらされて命を落とすことさえあった。それにもかかわらず、彼らは最後まで信仰を捨てなかった。むしろこのことを通して、”彼らが信じていることは、命を懸けるほどの値打ちのあるものなのか？そんなにも価値あることなのか”という印象を人々に植え付けたのです。少なくともその人たちにとってそれほど大切なものなのだ…と認めざるを得ないものとなったのだということです。

聖書はわたしたちに、救い主イエス・キリストを証しします。このキリストに神の愛が表されていることを語ります。そして「永遠のいのちの希望」を語ります。

イエス・キリストを信じている者は、来るべきキリストの再臨の日に、必ずよみがえりのいのち、栄光の体に変えられるというのが、聖書が語る希望のメッセージです。

だからこう言われるのです。

:23LB …その日には、神が約束してくださった新しい体、すなわち、もはや苦しみも死もない体をいただくのです。

Ⅱ. すべての被造物に及びます

わたしたち以外のすべての神に造られた存在が、わたしたち、人の救いを待ち望んでいる…と表現されています。

:19-20 被造物は、実に、切なる思いで神の子たちの出現を待ち望んでいる。なぜなら、被造物が虚無に服したのは、自分の意志によるのではなく、服従させたかたによるのであり、

なぜなら被造物全体が、人の罪の影響を受けているからだということです。

3:17-18 更に人に言われた、「…地はあなたのためにのろわれ、あなたは一生、苦しんで地から食物を取る。地はあなたのために、いばらとあざみとを生じ、あなたは野の草を食べるであろう。あなたは顔に汗してパンを食べ、ついに土に帰る、あなたは土から取られたのだから。あなたは、ちりだから、ちりに帰る」。

わたしたち人の側に、その原因があったことを、聖書ははっきり示します。

それでも、神さまは人を愛しあきらめず、回復の希望が語られています。

8:21-22 かつ、被造物自身にも、滅びのなわめから解放されて、神の子たちの栄光の自由に入る望みが残されているからである。
実に、（そのために）被造物全体が、今に至るまで、共にうめき共に産みの苦しみを続けていることを、わたしたちは知っている。

そうしてそのことが分かった上で、私たちが回復されることの大切さ、神の子としていただくことを、わたしたちは強く待ち望む者でありたいと願うのです。

8:23 それだけではなく、御霊の最初の実を持っているわたしたち自身も、心の内でうめきながら、子たる身分を授けられること、すなわち、からだのあがなわれることを待ち望んでいる。

そして、聖書は語ります。

8:24 わたしたちは、この望みによって救われているのである…と。

「この望みによって救われる」それは、必ず来たるべき再臨のイエス・キリストの元で、新しい永遠の栄化された体をいただいて、その天上の祝福に預かることです。これは、自分だけの問題ではない、誰かの問題ではない。全被造物に及ぶ祝福のカギとなる。それはわたしたちの救いと宣教にかかっているのです。

Ⅲ. 大切なのは忍耐です

パウロはここで、「今の苦しみ」と「やがて現れる栄光」とを対比しながら、次のような信仰の姿勢を語っています。

:18 …今のこの時の苦しみは、やがてわたしたちに現されようとする栄光に比べると、言うに足りない。

つまり、パウロは現実の苦難の中にあっても、「神の子の栄光」という将来の完成を希望によって見えています。その希望は、あの命をも脅かす迫害の苦難に通されても手ばなさない、損なわれない希望であったということです。そしてこう語ります。

:24 わたしたちは、この望みによって救われているのである。しかし、目に見える望みは望みではない。なぜなら、現に見ている事を、どうして、なお望む人があろうか。

ここにあるのは、まだ手にしていない、けれどもそれは確実なものとして、臨み見て受けとめているという「望み」なのです。最後に、こう結んでいるのです。

8:25 もし、わたしたちが見ないことを望むなら、わたしたちは忍耐して、それを待ち望むのである。

これが、望みに生きた初代教会の人々の姿です。

ヘブル人の手紙には、このところと呼応するような言葉が述べられています。

ヘブル10:23 また、約束をして下さったのは忠実なかたであるから、わたしたちの告白する望みを、動くことなくしっかりと持ち続け、

この希望の告白は、使徒信条でも表された私たちの望みです。その生きざまや礼拝意識が変えられる望みであったことが、先ほどの続きに語られます。

ヘブル10:24-25 愛と善行とを励むように互に努め、ある人たちがいつもしているように、集会をやめることはしないで互に励まし、かの日が近づいているのを見て、ますます、そうしようではないか。

「望みに生きてる」というクリスチャンたちの、生き生きとした交わりと礼拝生活が浮かび上がります。それは改めて苦難の中にあっても手放さない望みの果実でした。

ヘブル10:32-34 あなたがたは、光に照されたのち、苦しい大きな戦いによく耐えた初めのころのことを、思い出してほしい。そしられ苦しめられて見せ物にされたこともあれば、このようなめに会った人々の仲間にされたこともあった。さらに獄に入れられた人々を思いやり、また、もっとまさった永遠の宝を持っていることを知って、自分の財産が奪われても喜んでそれを忍んだ。

そしてこう語ります。

ヘブル10:35-36 だから、あなたがたは自分の持っている確信を放棄してはいけない。その確信には大きな報いが伴っているのである。神の御旨を行って約束のものを受けるため、あなたがたに必要なのは、忍耐である。

わたしたちに、それにならう力があるだろうか…。そう思うかもしれません。

一足飛びではありません。そこにはプロセスがあり、そこに信仰の成長があります。

パウロは、「苦難が忍耐を、忍耐が練達を、練達が希望を生み出し、その希望は失望に終わらない」と語ります。（ローマ5章）

そこに聖霊なる神さまが、同伴してくださいます。共にいてくださるのです。

●さいごに

ローマ人への手紙8章をテキストにしながら備えをしていく中で、ヘブル人の手紙10章にも目をやることになりました。共通しているのは「望みに生きる」クリスチャンの姿であり、その希望が信仰生活を生み出しているありさまです。

ローマ人への手紙では、その生み出された神の子たちが被造物すべての癒しと回復につながる…という、霊的現実も見ただけです。

では最後に、わたしたちはどんな望みを持ち、またどう生きる者とされているか、ヘブル人への手紙でその勧めを見ておきましょう。

:37-39 「もうしばらくすれば、きたるべきかたがお見えになる。遅くなることはない。わが義人は、信仰によって生きる。もし信仰を捨てるなら、わたしのたましいはこれを喜ばない」。

しかしわたしたちは、信仰を捨てて滅びる者ではなく、信仰に立って、いのちを得る者である。